

# 富田英也先生に感謝

白鷗大学教育学部教授

益 田 勇 一

1974年、白鷗女子短期大学が開学した。短大が二度目の春を迎えたころ、富田先生は幼児教育学科でピアノを教え始めた。そして、42年が経過した。

富田先生ご自身が本格的にピアノを習い始めたのは高校2年のときだそう。意外に遅いことに驚いたが、よく考えれば、高2からレッスンを受け始め、すぐに音大のピアノ科に合格したの方がもっと驚きである。やはり才能なのだろうか。先生がピアノに興味をもつきっかけとなった出来事は小学生の時代に遡る。5年生の夏休みの宿題でオルガンを弾く課題が出され、2学期になって一人ひとり演奏させられたときに、担当の先生に褒められたそう。このときに富田先生の将来の方向性が決まったともいえるが、すぐにピアノ教室に通い始めたわけではない。富田先生が小学生だった1950年代は漸く戦後の混乱が落ち着き、これから高度経済成長期を迎えようとする時期で、誰でもがピアノを習える時代ではなかった。先生のご実家は宇都宮の電気屋さんで、私の父も宇都宮で電気屋をしており、おそらく父親同士は知り合いだったろうという話で盛り上がったが、それはともかく、当時ピアノのある家庭は少なかっただろうし、両親も必ずしも音楽や習い事に理解があったわけではないだろう。すぐに願いが叶わなかったことが、先生のピアノへの思いを強くしたのかもしれない。ようやく、東京へレッスンに通えるようになったとき、あの褒められた日から6年近くがたっていた。しかし、それでもまだピアノは買ってもらえず、断食して親を困らせたそう。

わずか2年足らずのレッスンで、富田青年は音大に合格し、東京での生

活が始まる。芸術系の大学で、音楽の学生と美術の学生を見分けることは容易である。服装が全く違うからだ。どちらが高価な身なりをしているかは言うまでもないだろう。両者の経済格差は悲しいほど明確である。しかし、富田青年は例外だった。ピアノ以外の楽器ではクラリネットを演奏したことがあるとのことだが、それを質に入れたこともあったそうだ。そのお金を握りしめて飲み屋の縄のれんをくぐったわけではもちろんない。コンサートに行ったのだ。当時、チケットが3,000円～5,000円で今とそれほど変わらない、ということは生活感覚からしたら相当高額であったということだ。さらに500円程度したパンフレットも購入した。演奏家の紹介や楽曲の解説を読みたかったからだ。お金がなければバイトで稼げばよいという考えは通用しない、日々の練習で時間が取れないのだ。印象に残る演奏会を伺うと、上野文化会館で聴いたフランス・クリダ（1932-2012）をあげられた。リストを得意としたフランスの才媛である。上野では演奏途中に突然倒れ、15分ほど中断した後、またステージに現れ演奏を続けたそうだ。プロの仕事を見せられた気がしたとのことだ。富田先生にこの話を伺ったあと、たまたま彼女のレコードを中古店で見つけ聴いてみたが、叩きつけるような力強いタッチとやさしく繊細な表現が同居した演奏が印象的であった。

音大を卒業後まもなく、富田先生は白鷗に勤めることになるわけだが、42年のあいだにいったい何人の卒業生を送り出したのだろうか。そのうち何人かは現在も事務局に勤務している。その中で、短大在学中に「オペレッタ部」で富田先生にお世話になったという職員のTさんにお話を伺うことができた。活動としては「三びきのやぎのがらがらどん」といった幼児向けの作品を、近隣の幼稚園や学園祭で講演するというものであった。短大では入学した次の年度には卒業を迎える。その間に幼稚園、施設、保育所の実習が組み込まれ、学生はとても忙しい日々を送っている。したがって練習は、授業終了後ばかりでなく、授業の空き時間も使って行われたとのことだ。富田先生は「オペレッタ部」の顧問であったわけだが、大体にお

いて文科系の部活の顧問というのは名前だけで何もしないというのが相場だが、先生はオペレッタの指導はもちろん、あるいは指導よりも、幼稚園との公演日程の調整などマネージャー的な仕事をなさっていたようだ。また、先生の奥様が部員のためにお弁当を作ってくれたこともあったようで、Tさんはそのときのことをよく憶えていて、感激したそうだ。富田先生は、講義や指導ばかりでなく、こうしたかたちで学生を支えるという仕事をされてきたのだと感じた。富田先生らしい仕事のスタイル、教員としての在り方に気づかされ、あらためて先生が白鷗を去ることが残念に思えてきた。